



幌内神楽保存会 会長  
 さとう かつしげ  
 佐藤 勝重さん

五穀豊穡や厄払い、住民の安全などを願った幌内神楽。4代目会長の佐藤さんは「歴史と伝統を継承する思いに曇りはありません」と話しました。保存会設立50年の11月14日には、北海道文化財保護協会から道文化財保護功労者表彰という名誉ある賞も受賞しました。獅子頭を操る佐藤さんを訪ね、幌内神楽への思いなどを伺いました。

## “守り神の舞い”で町民を元気に

幌内神楽の歴史は、明治時代にさかのぼります。厚真町史によると、明治28年5月に若手県出身者が入植し、山で働く人が遠くふるさとを離れた寂しさを紛らわせるために獅子頭（重さ約50kg）を作り、同40年に幌内神社が建立されて奉納されたと伝えられています。その後、昭和47年に幌内神楽保存会を設立。本家の岩手県で舞いの研修を受け、今日の礎を築きました。保存会歴40年の佐藤さんは、初めて獅子頭を手にした時に「こんなに重いのか。見た目と違い体力が必要だ」と驚きました。会員は10人、平均年齢は50歳を超えます。笛や太鼓などのパートがあり、田舎まつりを筆頭に幌内地区の祭りなどで演舞します。本番が近づくと、週末を中心に全員が集まり、収録した映像で足の運びや腰の位置などを確認し、力強さとしなやかさに磨きをかけます。「年に数回の発表なので、時間が空くと所どころ忘れてしまいます。先

輩の教えを思い出し、演者の呼吸を合わせながら躍動感ある神楽を体現しています」。約20分の演目でフラフラになりますが、成し遂げた充実感が疲労を吹き飛ばします。

秋祭りでは、無病息災を願って幌内地区で獅子が個別訪問していました。コロナ禍にあっても、住民から「今年は来ないのかい？」や「足が悪くなったから、獅子さんにかんで欲しいんだ」との声も寄せられます。地域とのつながりも垣間見ました。佐藤さんは、先輩を招いて今回の受賞のお祝いを考えています。「皆さんの協力で今日があります。喜びを分かち合い、受賞を励みに継続の使命感を共有したいのです」。

目が輝きました。「元日の時報を合図に、幌内神社で町の安寧を祈願して踊りたいと思っています」。コロナ禍の収束や震災復興5年への想いを神楽に込めるつもりです。